

---

 新刊紹介
 

---

Watanabe, M. & Malla, S. B. (ed.): *Cryptogams of the Himalayas. Vol. 1. The Kathmandu Valley.* i-vi+226 pp.+1 map. 1988. (Academia Scientific Book Inc., Tokyo. paper ¥8,000; hard ¥9,600). *Vol. 2. Central and Eastern Nepal.* i-x+212 pp+27 pls. 1990. (Academia Scientific Book Inc., Tokyo. paper ¥9,600; hard ¥12,800).

国立科学博物館では自然史の調査研究と標本試料蒐集の目的で調査隊を国の内外に派遣している。国内の調査は「自然史科学的総合研究」と呼ばれ、ほぼ2年の周期で調査地域を変え、国立公園を含む地域を主たる対象として海藻を含む植物、動物、古生物等の自然史の研究を行い、得た成果を国立科学博物館専報として刊行している(現在まで23号を刊行)。これに対し、国外の場合は主として文部省科学研究費補助金国際学術研究・学術調査によるもので、生物地理学上興味のある地域が対象に選ばれ、自然史の調査研究が行われている。研究成果は同じく科学研究費研究成果促進費により刊行されることが多く、従って出版の時期は必ずしも一定していない。

本書は国立科博植物第3研究室長の渡辺真之博士を隊長とし、2回に亘って実施したヒマラヤ・ネパール地方の隠花植物調査の研究成果をまとめたもので、2巻から成る。第1巻は1986年にネパールのカトマンズ地方での調査、第2巻は1988年にカトマンズを含むネパール中央部と東部において行った調査のそれぞれの研究成果を収録する。

第1巻は24編から成り、藻類に関する論文の題目と著者名は次のようである。カトマンズの藍藻(渡辺真之とJ. Komárek)、カトマンズのユウグレナ類(庵谷晃)、カトマンズの群体性ボルボックス目(野崎久義)、カトマンズの糸状緑藻(芳賀卓)、ネパールのクロコクム目(中野武登と渡辺真之)。なおこれらの他に、緒言(S. B. Malla)、調査研究の概要(渡辺真之)、カトマンズの細胞粘菌、ネパールの粘菌の1新種、ネパールのミズカビ類、ネパールカトマンズのケカビ目、カトマンズのサビ菌類、ネパールのクロボ菌類、カトマンズの軟質担子菌類、カトマンズの *Russula* 属(担子菌)、ネパール針葉樹林床の不完全菌、ヒフォミケ

ス類、カトマンズの地衣類ゲジゲジゴケ属とウメノキゴケ属、カトマンズ地方に生育する特記すべき蘚類、カトマンズのハイゴケ科の蘚類、カトマンズのシダ類の染色体、カトマンズのシダ類の分布地図等の論文が掲載され、さらに読者の便の為に、カトマンズの気候、カトマンズの地理、カトマンズの森林に関する解説的な論文があり、最後にカトマンズの地図が添えられる。

第2巻は18編から成る。藻類関係としては、藍藻 *Coleodesmium* 属(J. Komárek と渡辺真之)、ネパールの群体性ボルボックス目(野崎久義)、ネパール、チベット及び琉球から採集した *Gonium pectorale* (ボルボックス目)の和合性の研究(齊藤捷一)があり、その他に緒言(金井弘夫)、調査研究の概要(渡辺真之とS. B. Malla)、ネパールの接合菌類ハエカビ目、ネパールの子囊菌類、ネパールのクロボ菌 *Coleosporium* 属、ネパールのサビ菌類、ネパールの担子菌 *Russula* 属、ネパールの地衣類ゲジゲジゴケ属とウメノキゴケ属、ネパールのハイゴケ科蘚類の染色体、ネパールの蘚類、ネパールのシダ類、特に日本に関係のあるものの染色体数、ネパールのチャセンシダ属の1種のフラボノイドと分類、ネパール・カトマンズのシダ類分布地図。なお第2巻には美しい現地のカラー写真27葉が添えられ、読者を楽しませてくれる。

隊長の渡辺真之博士が所属する国立科博植物第3研究室は微生物研究室とも呼ばれ、先の室長、大谷吉雄博士により組織された微生物調査隊は1979年と1980年にネパールで採集と調査研究を行い、その成果を1982年に Otani, Y. ed. *Reports of Cryptogamic Study in Nepal.* The National Science Museum, Tokyo. 等に報告している。従って今回のものは、ヒマラヤの隠花植物の研究第2報及び第3報ということになる。

ヒマラヤの植物相の研究は、維管束植物に関してはかなり行われてきたが、下等隠花植物については少く、特に藻類についてのわれわれの知見は貧弱である。藻類を含むヒマラヤの下等隠花植物研究の今後の進展への本書の貢献は極めて大きく、よく調査隊を組織され、成果をまとめられた渡辺真之博士の労苦を多とし、深く敬意を表したい。

(日本赤十字看護大学 千原光雄)

---

 新刊紹介
 

---

濱田 仁：接合藻の生物学

264頁，私家版 1990，2,200円

アオミドロ，ツヅミモ，そして“接合”といった言葉は中学の頃に覚え，誰にも親しまれているが，いつどこで採集すれば“接合”を見ることが出来るのか，接合した後はどのようになるのか，“接合”を観察するにはどのように培養すればよいのか，などを教えてくれる手軽な本は意外と少ない。著者は元来遺伝の研究者であり，研究材料に接合藻を選び，採集・培養・観察にいろいろと苦勞したことから，自身の経験したことや確かめたことに基づいて本書を書き上げたという。

本書は9章から成る。前半の第1章 接合藻の採集と観察，第2章 接合藻の培養，第5章 接合藻の構造と分類は，接合藻を研究材料に取り上げた当初は藻類について門外漢であったというだけに，著者の記述は具体的かつ詳細で，この藻群を調べて見たい人に良い手引の役を果してくれる。第3章 水質環境と接合藻，第4章 環境の汚染と指標生物としての接合藻，第6章 放射線と接合藻の形態形成は，著者の本来の興味もさることながら，勤務機関（著者は富山医科薬科大学勤務）の関係もあって行ったと思われる著者自身の研究成果を中心に記述が展開しており，環境や公害の問題に興味をもつ人には参考となるところが多い。第4章の第4節「ゴルフ場周辺の排水のミカヅキモに及ぼす影響・まとめと苦言」は為政者にとってまさに頂門の一針ともいうべきものである。著者が最も力を注いだと思われる部分は第7章 接合藻の生殖に続く第

8章 接合藻の生活史と第9章 接合藻の遺伝の項であり，ここで接合藻の核相に関し，著者はかねてより主張する，従来の教科書的な説と異なる新しい考えについて詳述している。著者の説の根拠の出発はミカヅキモを蛍光色素 DAPI で染色し，蛍光顕微鏡で観察して核の部分の DNA 量を測定した結果に基づくもので，それによると栄養細胞は2倍体であるという。著者は多くの頁を割いてこの問題を解説し，そして論議を行っている。多くの方々に一読を奨めたい章である。それにしてもことが重要であるだけに，他の幾つかの接合藻についても同様な実験と観察の実施が望まれる。本書は末尾に「接合藻の名前とその由来」，「用語の説明」及び「引用文献」の項があり読者の便に供される。また口絵には蛍光顕微鏡像等の美しいカラープレート8葉が添えられる。本書の題名は「接合藻の生物学」がであるが，「培養，分類，生活史，遺伝から環境，公害の問題迄」の副題があり，興味のあるユニークな内容となっている。私家版のせいか，目次と本文の章や節の題目に不一致のところが若干見られるのは残念である。また図のレイアウトや図中の文字に今一步の工夫があれば良かったと思われる。なお，「接合藻の名前と由来」の項に20余の新称和名が提唱されているが，これはこの本の性質上早い機会に「藻類」等への公表を望みたい。本書の入手希望者は発行所である〒939-03 富山県射水郡小杉町南太閤9-44の著者の自宅（電話0766-56-6658）に直接申し込むこと。

（日本赤十字看護大学 千原光雄）